

■ 北海道情報大学学内報



NANAKAMADO



世界遺産アユタヤ遺跡(タイのワット・チャイ・ワタナラム)(写真:瀧澤浩基)

● 目 次 ●

学長に就任して 学長 久野 光朗 ……………2	就職コーナー ……………9
退職にあたって ……………3~7	主要行事 ……………10
海外訪問記 事務局 会計課 瀧澤 浩基…8	編集後記 ……………10

発行・北海道情報大学  
 〒069-8585 江別市西野幌59-2 TEL011-385-4411 FAX011-384-0134



## 学長就任にあたって

学 長 <sup>く</sup> 久 <sup>の</sup> 野 <sup>みつ</sup> 光 <sup>ろう</sup> 朗

昨年の9月で満70歳に達した小生は、本年3月末で定年を迎え、あとの2年間を特任教授として久しぶりに教育と研究に専念させてもらい、一介の研究者としての生活をまっとうできることを楽しみにしていました。ところが、ところがです。今回、はからずも学長に就任することになってしまいました。

会計学を専攻する小生は、これまで単著3冊をはじめ編著・監訳書をふくめて9冊——物理的に教えれば上・中・下の3巻本があるので11冊を公開してきました。したがって、先に言及した特任教授の期間にライフワークとなる単著を上梓できれば、ちょうど10冊（物理的には12冊）という区切りがつくので、そのことを楽しみにしてきました。すでに『アメリカ財務会計生成史』という書名まで想定し、原稿も大体半分ぐらい準備ができていたのです。

学長就任といっても、正直いって、まだ実感がわいてきません。昔ならば、不言実行と称し、実績によって謙虚に評価を受け入れるというのが筋であったかもしれません。しかし、今日では、有言実行が要求されます。でも、小生には大言壮語するだけの力量もなければ、またその気もありません。大学が、経済不況におかれている今日、まずは火中の栗を拾う覚悟で対処していかなければならないでしょう。

変化の激しい今日の社会では、いかなる分野においても、現状維持にとどまることは敗北を意味することになってしまいます。将来の発展を期するならば、オーストリア生まれのアメリカの経済学者J.A.シュンペーター（1883-1950）の名言どおり、「創造的破壊」が必要であります。「破壊的創造」といってもよいでしょう。本学の初代理事長松尾三郎が大学創立の理念とされた「国際化」

と「情報化」という理念を踏襲しつつも、新しい時代の要請に即応する教育と研究には不断の改革が必須の条件になります。

大学創設以来の経営情報学部は、すでに13年の歳月を経過しています。また、同学部の通信教育部は8年、大学院経営情報学研究科も6年の歳月を経ています。これらの組織については、まっ先に、待ったなしで改革にとりかからなければならないと考えています。さらに、昨年、設置されたばかりの情報メディア学部ならびに教職課程についても、完成年度を待ってから改革にとりかかるというのではなく、今から完成年度にそなえて改革構想に着手しなければならないと思います。

大学という組織は、人・物・金・情報という要素から成立しているという点で、他の組織と同様だといえますが、なかんずく学生・教員・職員という人的構成要素が重要であります。極論すれば、学生諸君の卒業後の社会的評価によって大学それ自体が評価されるといえるのではないのでしょうか。そうだとすれば、教員と職員は、力を合わせて、入学してきた学生諸君に対し、できるだけ多くの付加価値をもたらすよう日々の努力を傾注しなければなりません。他方、学生諸君もまた、その期待に応えるべく、自己を厳しく律しながら自己実現を図るようにしなければなりません。

大言壮語はしたくないといいながら、つい力んでしまった感もないわけではありませんが、小生一人だけの能力は、しょせん小さなものであり、すべての教員・職員・学生の力添えがなければ、所期の目標を達成することは不可能です。小生も、自分のできる範囲で最善の努力をいたす所存ですが、どうか皆さんの真摯な助言・助力をいただければ幸いです。大学に求める以上に、自分は大学に対して如何なる貢献ができるかを考えていただきたい。

# お世話になりました

(順不同)



## 大学の扶持を受けた50年

前学長 おの 大野 きみ 公男 お

1951年(昭和26年、以下西暦を用いる)に東京大学理学部物理学科・小谷正雄教授の研究室を卒業した私は、僅か1年の大学院生活の後、1952年4月に、同研究室の助手に任じられた。これは私にとっては大変意外な出来事であった。

一つの理由は、同じ研究室に同時に卒業したT君が居たからである。T君は、M高校(旧制)を1番で卒業し、大学での成績も優秀と思われた。おそるおそる“T君もおられるのでは”と申し上げたら、先生はこともなげに、“T君は特研究生になっているでしょ”と言われた。特研究生とは、特別研究生の略で、成績優秀なものに貸与される、当時としては高額の奨学金を貰う学生のことである。先生にとっては、特研究生も助手も同じようなものに思われたのかもしれない。私はただ有り難くお受けした。

学生から教官に身分が変わった当初はまごつく事も多かった。省線(現在の国鉄)のお茶の水駅から理学部の前まで市バスが走っていて、光学のK教授とご一緒になったことがあった。先生の後から階段を上ろうとしたら、先生は振り返られて、「出勤簿に判を押さないのですか?」と注意され、「以前は、新任教官は各研究室に辞令を持って挨拶に廻ったものです」と付け加えられた。私は慌てて回れ右をして玄関脇の物理事務室に行き、出勤簿のことを尋ねたら、「何日か纏めて押す先生が多いですよ」と教えてくれた。挨拶回りの件は、小谷先生にお尋ねしたら、一寸小首を傾げられて、「大野君はこの教室の卒業生だから良いでしょ」と言われたので、サボることにした。

小谷研の助手はそれから12年続いた。その間に英国の“University College of North Staffordshire”(現Keel University)に1年半、スウェーデンの“Uppsala大学”のLoewdin教授の研究室に2年、引き続き同教授の“Florida大学”の研究室で1年を送らせていただいている(スウェーデンアメリカでは家族同伴、次男はスウェーデンで生まれた)から、小谷研の助手としては7年半しか勤務していない。

大学の使命は研究と教育にあるとよく言われるが、この12年間は、研究が主で教育が従だったと思う。

現在までの研究論文・著書などは85編しかなく、大部分は共著で単著は僅かである。そのうち25編、約3割が助手時代の産物である。一方教育の方は、小谷先生の担当された物理数学演習のお手伝いをしたことがあるに過ぎない。

私は1964年に北大理学部化学第2学科の量子化学講座の教授に任じられ、それが26年間続いた。私が東大から北大に転じたきっかけは、1963年の夏、駅の東半分はイタリーで、西半分はフランスという国境の地下駅モントンで、スウェーデンから行った私と北大から来られた故相馬純吉先生がばったり出くわしたことに始まる。私にとっては初対面であったが、相馬先生は物理学会の懇親会でお会いした私を覚えておられたらしい。日本人の悪い癖か、10日ほど続いた“夏の学校”では、二人で話をする事が多かった。その時北大の理学部で、従来の化学科の他に、化学第2学科の創設の計画が進行中で、その講座の中には私の専攻する量子化学も含まれ、創設準備の委員会には学外から小谷先生が参加されておられることを知った。スウェーデンに帰って早速小谷先生にお手紙を書いて、「もし先生が適格と判断していただけるならば、推薦していただけますか」とお願いしてみた。先生からはすぐお返事が来て、「君が東京を離れる可能性は考えていなかった、推薦してあげましょう」とのことであった。北大では研究と教育が半々であったと思っている。唯1971年のいわゆる大学紛争の頃から、学生部長、大型計算機センター長、図書館長、触媒化学センター長など、管理的な仕事をやらされるが多くなってしまった。

北大定年後は2年間東京で学術情報センターに勤務した。妻が病身で、月曜日に札幌から出勤、金曜日に札幌に戻るという生活だった。

その後は、かねてからの今田局長との約束で、北海道情報大学に勤務させていただいて、2002年を迎えたのである。丁度50年間大学(とその関係機関)に勤務させていただいた。不敏の私を指導し、あるいは共同し、助けて下さった諸兄諸姉に感謝の念を新しくしている。

# お世話になりました



## 本学創設に関わる思い出

元学長 三枝 武 男

私が今日まで長く健康で勤務できたのも、本学全教職員のご協力のお陰と考え、まず、感謝の意を表したい。

平成13年度より、念願の情報メディア学部がスタートし、情報系総合大学としての形が一応整ったことは、ご同慶にたえない。

今まで折に触れて「ななかまど」や「HIU通信」などにいろいろな記事を記してきたが、私は戦時中に海軍技術士官として海軍技術研究所で上司の松尾三郎前理事長に出会い、共に電子工学系の研究活動を行ってきた。

終戦直後、教職につき、東京都立大学工学部・防衛大学校などを経て本学の創設にかかわり、今日を迎えた次第である。故松尾前理事長とは、引き続きご交誼いただき、折に触れてその活躍ぶりを拝見してきたが、教育面では、現情報技術専門学校(HIS)を各地に創り、その後の大学創りの構想は早くから聞かされていた。

一年間の準備期間を中野の本部に通い(学園理事)、平成元年本学開設と同時に、学部長兼情報学科主任の辞令を受け、学長を経て、通算14年間になる。この間、多忙であったが幾多の思い出が懐かしい。畑以外何も無かったこの野幌に、周辺の住宅を含め大きな変貌を見たのは、今昔の感を禁じえない。

本学では、「電子工学概論」と「応用計測学」の講義を一貫して担当した。また木下元学長を補佐し、初年度からの教員用大学紀要、一期生からの卒業小論集も発行してきた。自己点検・評価報告書においては、平成6年度・8年度版につづき、一年おきに作成の基盤も作った。

その他、通信教育部発足からみ、学習情報通信技術研究所(SRL)が開設され、7年間プロジェクトの研究活動を指導するように前理事長から指示を受け、小銭常務らと予算獲得や40数名の研究員の募集、毎月1回の研究成果発表会を司会など、厳しかったが

懐かしい思い出は尽きない。この間に、3冊の論文集編集や、2名の学位取得者も出た。SRLで育った数名を推薦したが、現在、夫々が本学教員として活動を続けている。また、新学部増設に当たって親交のある清家前校長を通じ、札幌市立高専からも、数名の教員に来ていただいている。

3学部の増設と、本州(塩尻・関西・大牟田)へのキャンパス拡大という故前理事長の構想のもと進められてきた大学誘致運動は、バブル崩壊と前理事長の急逝により、本計画は軌道修正せざるを得なくなったが、少子化の厳しい時代を何とか乗りきって行ってほしいと期待している。

思い起こすといろいろなことが浮かぶが、この間に文部省主催の大学遠隔教育システムについて、衛星多元パネル討論会が計4回実施された。4回目は、平成6年12月に全国10箇所を通信衛星で結び、大学の学長、学部長等をパネリストとしてリフレッシュ教育の推進についてパネル討論した。本学から私が北海道代表で参加し、2時間30分の講演・質疑応答を正確に実施できた思い出がある。また、第21回全国経営学部長会議でコメンテーターを依頼され、平成8年9月創価大学学生ホールで「衛星通信教育による国際放送教育」と題した講演をし、多くの質問を受け反響の多さに驚いた。その後、中国の南京大学、タイのモンクット王工科大学と本学を結んだ国際実験も好成果をおさめている。

創設当初からお世話になった有江元北大総長や木下元学長はじめ多くの定年教員・中途死亡教員・転出教職員などとの思い出も尽きない。紙面の都合で概略のみ述べて退陣の挨拶とする。長い間お世話になりました。今後も機会を見て発展振りを陰に陽に見守って行きたいと思っている。

松尾 泰現理事長を支え、皆様のご健勝と本学のますますの発展を祈念してやまない。

# お世話になりました



## 学生諸君へ

前経営情報学部経営学科 教授 佐々木 正文

7年間勤務した本学を去るに際して学生諸君に向けて記した。

日本の長い歴史の中で高度成長が頂点に達し、維持した期間はほんの一瞬であった。敗戦で全てを失った焼け跡から、経済的に恵まれた社会を実現させた原動力の一つは戦前・戦中の日本の社会に定着していた道義心と勤勉さであると見る学者も多い。

高度成長の頂点の頃、大学4年生が4月に就職先の内定を2箇所以上から貰ったという例も少なくなかった。大学を卒業すれば就職は約束されているという風潮が定着するに及んで、日本の大学生の夢は貧弱になり、墮落が目につくようになった。女子学生が高価なブランド物を持ち歩き、知人のアメリカ人の大学教授からは最も修業すべき学生時代なのにと慨嘆の声も聞かれた。本学のゼミの学生とのコンパの席で、10年先の夢を聞かせて欲しいとの私の発言に、かなり多くの学生が結婚して家庭を持ちたいと答え、考え込んでしまった記憶がある。

この当時、多くの会社では大学では基礎をしっかり勉強して欲しい。会社にとって必要な知識や技術は会社で教育するとの声も聞いた。実際、多くの会

社は社内教育ばかりでなく、会社で経費を負担し外部のセミナー等に参加させる例が多く見られた。

大学では知識そのものだけを学ぶのではなく、次の2つ

- (1) 学問に対する心構えを身につける。
- (2) 考えるやり方を身につける。すなわち、
  - 1) 目先に捉われず、長い目で見る。
  - 2) 一面だけを見ず、多面的、全面的に見る。
  - 3) 枝葉末節にこだわらず、本質を見る。

ことが大切であるといわれている。

戦後の日本は少ない天然資源、しかし人的資源は豊富といわれた。最近の日本は人的資源も貧弱になったといわれる。多くの会社は社会環境の変化に応じ、直ぐに役立つ資格と実力を備えた人材を求めるようになった。東京の大学生の多くが就職対策のために、昼は大学で学び、夜間は専門学校で学ぶケースが増えている、中には2つの専門学校に通っている例さえある。

情報大学で学ぶ諸君は情報処理に関する出来るだけ高度の実力と資格を身につけ、明るい自己の未来を築くことを願って止まない。



## 在校生諸君に贈る言葉 「時は命なり」

前経営情報学部情報学科 教授 古室 俊行

「時は金なり」という言葉はよくきく。しかし「時は命なり」という言葉は、経済学者河上肇が初めていった言葉である。資本家に労働者が売りつけるのは、労働者の命であるという意味で使った言葉である。

刻々と過ぎ去って行く時間、自分の命をけずって

いく時間でもある。

特に、諸君の若さの時間は貴重な時間である。水がかわききったスポンジを吸うごとく何でも吸収できる時間であるから。

人生には誰もが悩む二つのことがあると言われて

## お世話になりました

いる。一つは人生の意味に悩むこと、もう一つは人生の価値に悩むということである。

人生の意味に悩むというのは、諸君のような若い時代に出会う悩みである。

もう一つの悩みというのは、晩年「自分は何のために生きてきたのか」という人生の価値に悩むことである。

その時、いくらやんでも、過ぎ去った時間はもう帰ってこない。

人生の価値の基本は、実は諸君の時代につちかわれるのである。

その意味で、諸君の今を、この貴重な時間を大切にしたいものである。



## 退職に際して

前経営情報学部情報学科 助教授 伊藤 公紀

私は本学の通信教育部の開設に合わせて平成6年4月に赴任し、以後8年間、北海道情報大学にお世話になりました。8年間を振り返ると、様々な思い出が脳裏に去来します。この間、多くの皆様に支えられながら、教育・研究を行うことができたことを大変幸せに思います。

北海道情報大学の通信教育部の授業方法の一つである衛星放送を用いて授業を行うといった他の大学では類を見ない教育システムに携わることができ、大変良い経験を積ませていただきました。近年、日本だけでなくとどまらず世界的にも大学や大学院レベルの教育を時間と空間の制約を緩和して、学習を希望するすべての人に門戸を開ける遠隔教育の制度・枠組み・方法論の研究への取り組みが活発に行われつつあります。北海道情報大学は早期からこの必要性

を強く意識し、教育環境のバリア・フリーを目指して取り組んできており、今後の研究・実践を通して遠隔教育分野での強いリーダーシップをとっていくことでしょう。

また、通学においては、特にゼミナール所属の学生たちの思い出が強く印象に残っています。3年次に私の研究室のドアを叩いてゼミに所属した学生たちが、私の予想を遥かに超えて立派に成長し、誇りを持って卒業を迎える様子を見せてくれることが、何よりも嬉しい私への褒美でした。このときの言葉に表現しつくせない充実感が、私にとって次の学生指導の燃料となっていました。私にとって忘れぬ良き思い出です。

最後に北海道情報大学のますますの発展と皆様のご健勝を祈念いたします。ありがとうございました。



## 13年間を振り返って

前経営情報学部経営学科 教授 浅岡 顕彦

平成元年3月末にこの大学を訪れた時、まだ雪が少し残ったままの荒涼とした景観のなかに新しい建

物が目に入りました。これが大学との最初の出会いでした。少し時間が過ぎて若葉が芽吹いて淡いグリ

# お世話になりました

ーンにつつまれるようになって、豊かな自然につつまれた新しい大学がありました。

その頃は初期の情報革命が一巡して、集権的な情報システムの採用による生産効率の向上が広く認識されるようになり、それを支える情報産業が新しい産業として発展・確立した時代であったように思います。(情報技術の進歩は急速で、程なくネットワーク化された分権的システムへの移行に代表される次の情報革命が始まり、本学の教育条件・内容もそれに対応したものに改革されました。)その時期に情報系の専門大学として野幌の地に開学した情報大学の前途は洋々たるもののように思えました。言語教育を担当することで情報処理教育の一端を担うことになったのですが、その責任の重大さに身が引き締まる思いがしたことを記憶しています。そしてパートナーの先生にも恵まれ、そのまま13年間を走り続けたような気がします。夢をもって入学してきたフレッシュな一年生が相手ですから、おのずと力が入ります。とくに実習授業は双方向で一方通行ではありませんので、顔と名前がすぐ一致するようになります。お陰で、卒業式の日に困ったことはありません。

専門ゼミナールでは、学生諸君が2年間学び、最後に卒業研究をまとめた時にみせる達成感ある表情をみるのが楽しみでした。よく学びよく遊べをモットーに勉強が終わると、つぼ八、カラオケ、ボーリングにたびたびでかけたものでした。また、体育祭、大学祭などあらゆる機会を通じて学生諸君と一緒にできることはするよう心がけてきました。学生諸君に心配させたかもしれませんが、年を忘れて体育祭の駅伝競走で学生のチームに入り激走?もしました。

(写真)

毎年多くの学生諸君と出会い、勉学以外にもさまざまな関わりを通して、これまで自分が獲得してきたことを若い学生諸君に伝えていきたい、そのような欲求を持続できたことで教師としての充足感を獲得できたことは自分にとって大変幸せなことであったように思います。

今でも心に鮮明に残っているのは私が学生部長をしていた平成8、9年度の2年間における学生諸君との交流でした。(写真)主として文化系と体育系の課外活動を担うグループで、勉学以外にも色々なことに取り組んで情報大学における学生生活を充実したものにしたいという意欲にあふれた連中でした。彼等は多くの要求を突きつけてきましたが、私にはそれはよく理解できる内容でした。そのなかで彼等は情報大学が将来どのような大学になって欲しいか、自分達なりの明確なビジョンを述べていました。

いつも時代の先端に行くような勉強ができること、多様な課外活動が可能な施設などの条件整備、そして学内における学生生活上のアメニティーの確保など広範囲に及ぶもので、将来にわたって大学が立派に存続できることを願うものでした。

彼らの理想とする情報大学像として、一定の能力や条件を満たす受験生でなければ入学できない、そして卒業後に社会の一線で活躍する卒業生を多く輩出できるような一般に言われる偏差値の高い大学への発展をイメージしていたように思います。延々と続いた話し合いのなかで彼等の唯一の母校への熱い思いが伝わってくるような気がしました。彼等の真摯な態度に大いに心強くしたものでしたが、要求に対しては残念ながらそのごく一部しか応えることができませんでした。その時に話し合いに参加した学生諸君はすでに立派な社会人になっています。そのうち幾人かとは今でも付き合いがありますが、なかには一度も教えたことが無い卒業生も含まれています。大学にも色々な出会いがありますし、大学教育は知識や技術を教えるだけではなく、人を育てるということはもっと全人間的なものであるように思います。そして、学生諸君との関わりのおかげで自分も教師として少しは成長できたのではないかと感の深くしております。

今大学を去るにあたって、これまでの軌跡を振り返って印象に残ったことをお話ししましたが、学生諸君には、大学では何かに懸命に打ち込むことをお勧めします。そうすれば、これまでとは違う新たな自分を発見できることでしょうし、それが充実した学生生活につながります。若い諸君には変化は進歩であるのですから。



(任期を終えて)

# 海外訪問記

## マレー半島縦断旅行

事務局 会計課 瀧澤浩基

2001年9月のテロ事件以降、海外旅行に出かける人が減少していますが、現在でも比較的安全と言われている地域、また日本から近い割には大いに異文化を感じる事ができるマレー半島を旅行した時の体験談を紹介してみたいと思います。

まず、マレー半島とはタイ、マレーシア、シンガポールがある東南アジアの半島で、バンコクからシンガポールまでの全長2000km弱のマレー鉄道や各都市間を運行するバスなど移動手段には事欠きません。

最初に私が到着したのはタイの首都バンコクでそこからシンガポールまで南下する事にしました。このタイという国ですが、私が大好きな国で以前短期間ホームステイした事があり、その気候、純粋な人たち、そして何よりも物価の安さが気に入りました。人々は敬虔な仏教徒が多く、朝は托鉢している姿が多く見られ、街にはたくさんのお寺があります。バンコク周辺には世界遺産のアユタヤ遺跡、映画「戦場に架ける橋」で有名なカンチャナブリや水上マーケット、ムエタイ観戦等観光する場所がたくさんあります。

数日間のんびりとバンコクで滞在した後、鉄道を使ってタイ南部の都市ハートヤイへ行く事にしました。鉄道に乗っている時間は約18時間、もちろん寝台で行きましたが横の窓ガラスに、今にも割れそうなくらいヒビが入っている事が気になってなかなか寝付けませんでした。日本では電車の窓ガラスにヒビが入ったまま走るなんて事は考えられませんが、その辺がよくタイ人が言われる気質「マイペンライ(タイ語で気にしない)」なんだとつくづく感じたものです。1時間程遅れて朝10時頃、ようやく目的地のハートヤイに到着しました。タイ南部最大の都市という面影はなく、小さな駅に寂れた街という印象が強かったのですが、その日はたまたまタイの灯籠流しのお祭り(ロイカトーン)が行われる日で、会場は非常に熱気に溢れていました。お祭りでタイの民族衣装を着た女の子と一緒に写真を撮ってもらい、そこで彼女のお兄さんと意気投合して車で街を一通り案内してもらいました。その後彼の友達2名が乗り込んできて車はどんどん暗闇の方に進み、内心恐怖感を覚えたのですが、結局着いたところは街のいずれのカラオケ屋で楽しい時間を過ごす事ができました。彼には大変お世話になり、今でも年に数度メールで連絡を取り合っています。その後バスでマレーシアのペナン島に向かい、港町ジョージタウンで数日滞在することにしました。この町は、朝は5時頃スピーカーからコーラン(今では有名になったイ

スラム教の神聖な書物)を読む声が流れてきてその音で目覚め、お祈りや観光に装飾の美しいヒンズー教や仏教寺院、教会を訪れる事ができる複数の宗教と民族が共存している羨ましい町です。ジョージタウンを後にしてマレーシア中部の町イポーに寄り、クアラルンプールに向かいました。ところがその途中、バスのスピードが徐々に落ち時速20km程度でしか進まなくなったのです。どうしたのかと思ったら、運転手がおもむろに床を開けその途端車内に煙が充満し、何やらよくわからない液体を注入しました。しかし、結局スピードは上がらないまま何とかクアラルンプールに到着する事ができました。クアラルンプール、そして次に行ったシンガポールは近代的な建物が多く、特筆する事はありませんが、強いて言えばマライオンはさすが「世界三大がっかり名所」の一つだという事ぐらいでしょうか。

私がこの旅行をしたのは11月中旬、タイは乾季で過ごしやすく、シンガポールはスコールが多い時期ですが、気候的に11月～2月がマレー半島旅行にはお勧めだと思います。食事を心配される方にとっても、タイでは御飯を食べる事ができますし、マレーシア、シンガポールでも特に困ることはないと思います。ただ私は独特の香辛料(特にパクチー)が苦手で、いつも抜いてもらっていました。また、果物の王様と言われているドリアン臭いにはいまだに慣れません。

卒業旅行や一人旅で今回紹介した地域に行ってみようと思った学生がいましたら、知っている情報を提供しますので気軽に相談に来てください。日本では絶対にできない陸路での国境越えや、色々なトラブルに遭う事、日本とは違う文化、民族や宗教に触れることは、残りの学生生活を充実させるためにも良い経験になると思いますよ。



(バンコク ホアランボーン駅にて)



# 就職コーナー

## 就職課ホームページのご案内 【全学生対象】

### 1. 求人情報閲覧システム

本学就職課では、皆さんの就職活動を支援するために、大学に届いた求人票と本学通信教育部教育センターに届いた求人票をインターネットで閲覧するためのシステムを昨年度から運用しています。このシステムには就職課ホームページからはいることができます。

- (1) 使用可能なマシン：学内のマシンのみ（自宅のマシンからは閲覧できません）
- (2) アドレス：http://job2.do-johodai.ac.jp/の就職課ホームページから「北海道情報大学求人検索」に進んでください。公式ホームページ（http://www.do-johodai.ac.jp/）から学内サーバに入り、そこにリンクされている「就職情報」からでも就職課ホームページに入ることができます。
- (3) 閲覧可能な求人票：①本学で受理された求人票  
②全国16ヶ所の教育センターで受理された求人票（予定）
- (4) 閲覧できる内容：求人企業の基本情報、求人内容、説明会情報  
求人票のイメージ画像 等

このシステムの運用によって、学内のマシンからであれば就職課の窓口営業時間を気にせずに企業情報を閲覧することができます。是非利用して下さい。

### 2. 就職課からのお知らせ

就職課ホームページには、「就職課からのお知らせ」があります。

- ・「就職指導スケジュール」には、皆さんの就職指導スケジュールが掲載されています。就職指導日程の確認等に使用して下さい。
- ・「連絡事項」は日程が近くに迫った就職指導の内容説明や、合同説明会の開催日程等の情報、その他様々なお知らせが掲載されています。
- ・「現在の本年度内定状況速報」では内定状況がわかります。チェックしてみるのも一興では。
- ・「就職活動の進め方」は、『就職活動をここまでやった。次に何をしたらいいんだろう?』という疑問に答えるためのページです。就職活動の途中でフト立ちすくんで方向性を見失ってしまったとき、是非参考にして下さい。

この「就職課からのお知らせ」は、随時更新していきます。また内容も少しずつ充実させていく予定です。定期的にチェックして就職活動の参考にして下さい。

### 3. 就職サイトへのリンク

主な就職情報誌のサイトや、学生職業総合支援センターへリンクをはっています。活用して下さい。

## すでに内定をもらった学生へ 【学部新4年生・大学院新2年生対象】

早々に内定おめでとう！ところで就職課は、皆さんの内定について状況を把握する必要があります。内定をもらったら必ず就職課に連絡をして下さい。また、今後も活動を続けるのであれば、重複内定をもらう可能性もあります。その際いずれかの内定を辞退するわけですが、内定辞退は様々な問題を引き起こすことがあります。内定辞退を簡単に考えずに、慎重に対処して下さい。就職課ではいつでも相談を受けつけています。

◆◆ 教職員の動向 ◆◆

☆ 法人本部 ☆

◇事務職員人事◇

- 退任(3月31日付) 常務理事・法人本部長 岡本弘行
○就任(4月1日付) 常務理事・法人本部長兼大学事務局長 中居聰士(理事・副本部長)
○昇任(4月1日付) 東京事務所 所長代理 田中克義(東京事務所課長)
○配置換(4月1日付) 広報室副室長 大橋正典(北海道情報専門学校)

☆ 大 学 ☆

◇教員人事◇

- 定年退職(3月31日付) 教授 久野光朗
○退職(3月31日付) 学長 大野公男
○任期満了(3月31日付) 特任教授 古室俊行
○昇任(4月1日付) 教授 穴田有一(経営学科)
○採用(4月1日付) 教授 森澤好臣(情報学科)
○定年退職(3月31日付) 教授 久野光朗
○退職(3月31日付) 学長 大野公男

◇事務職員人事◇

- 定年退職(3月31日付) 教務課長兼大学院課長 加藤邦雄
○昇任(4月1日付) 図書館事務室長 佐藤貴俊(会計課図書係長)
○配置換(4月1日付) 教務課事務係長 角谷有規(教務課入試係長)
○採用(4月1日付) 総務課 岡田直子 会計課 中田圭亮

◆◆ 11月～3月主要行事 ◆◆

☆ 法人本部 ☆

10月16日(火)・17日(水) 総務省北海道管区行政評価局実地調査

☆ 大 学 ☆

- 11月16日(金) 経営情報学部教授会
21日(木) ISS-SCS宇宙講座
25日(日) 推薦入学試験(経営情報学部・情報メディア学部)
30日(金) 全学教授会
12月7日(金) 親交会忘年会
14日(金) 経営情報学部教授会・情報メディア学部教授会
21日(金) 全学教授会

- 28日(金) 仕事納め
1月4日(金) 新年交代会
18日(金) 経営情報学部教授会・情報メディア学部教授会
19日(土) 大学入試センター試験
20日(日)
25日(金) 全学教授会
26日(土) 父母と教員との懇談会
2月2日(土) 一般1期入学試験(経営情報学部)
3日(日) 一般1期入学試験(情報メディア学部)
15日(金) 経営情報学部教授会・情報メディア学部教授会
16日(土) 2次募集選抜試験(経営情報学研究科)
22日(金) 全学教授会
3月1日(金) 経営情報学部教授会
6日(水) 一般2期入学試験(経営情報学部・情報メディア学部)
13日(金) 経営情報学部教授会・情報メディア学部教授会
15日(金) 学位記授与式(経営学科106名、情報学科99名、経営情報学研究科10名)
19日(火) 全学教授会

☆ 通信教育部 ☆

<入学選考>

- 11月16日(金) 第2回入学選考
1月18日(金) 第4回入学選考
3月8日(金) 第6回入学選考
12月14日(金) 第3回入学選考
2月15日(金) 第5回入学選考
3月26日(火) 第7回入学選考

<スクリーニング>

- 11月16日(金)～18日(日) 名古屋、福岡
11月17日(土)～19日(月) 札幌
11月23日(金)～25日(日) 千葉、新潟、山梨、名古屋
11月27日(火)～29日(木) 福岡
11月30日(金)～12月2日(日) 全国14カ所
12月4日(火)～6日(木) 札幌
12月7日(金)～9日(日) 新潟、名古屋、大阪
2月11日(月)～14日(木) 冬期スクリーニング(ニセコ)

<印刷授業科目試験>

- 1月11日(金)～13日(日)
15日(火)
19日(土)～20日(日)

<学位記授与式>

- 3月22日(金) 第5回学位記授与式

<再試験>

- 3月18日(月) 再試験

◆◆ 広報活動 ◆◆

- 11月17日(土) 通信教育部説明会(東京)
11月27日(火) 音更高校模擬授業
11月～12月 高校訪問(道内主要高校)
12月22日(土) 入試説明会及び情報セミナー(札幌ガーデンパレス)
2月9日(土)～3月3日(日) 通信教育部合同説明会(東京、仙台、大阪、名古屋、広島、札幌、福岡)
2月下旬～3月中旬 高校訪問(道内近地)
3月23日(土) 春のオープンキャンパス

\* TVCM \*

- 11月～3月 HBC、STV、HTB

◆◆ 主な来校者 ◆◆

- 11月21日(木) 南京大学副学長(他教授2名)
2月5日(火) 滝上高校教員
2月26日(火) 厚岸潮見高校教員
3月7日(木) 江別第三小学校生徒

編集後記

待ちに待った春の到来です。卒業、入学のシーズンでもあり、寂しさと嬉しさが交差する季節となりました。教職員にあっても退職された方、また新しく本学にきていただいた皆さんなど、慌ただしい変化です。

退職された皆さん、本当に長い間ありがとうございました。さて、お知らせを兼ねてお願い、表紙を飾る写真ですが、種切れになってきました(既に切れています)。そこで、読者の皆様に写真を提供戴ければと思います。掲載分には、薄謝と撮影者の氏名を掲載して参ります。写真の内容は、風景画を中心をお願い致します。人物は実在・故人に拘わらずご遠慮願います。皆さんの手で学内報をもちたてて下さい。(S)

北海道情報大学学内報

「ななかまど」第22号

- 発行日 平成14年4月1日
発行 北海道情報大学
編集 学内報編集委員会